

## 数学図書と分類

旧聞ながら、今の様子が筆者の気になっていることがある。大きな数学教室の図書の扱いのことである。従来は、教室内に数学系蔵書を収蔵する占有図書室を備え、配架法や人員も含め、数学教室が独自に管理してきたところが多かった。しかし、人員にせよ、増大一方の蔵書収容のための面積にせよ、数学教室には捻出の余裕はなくなっている。事情は数学以外の教室でも同様であり、このような余裕の喪失が図書の集中化の重要な推進力になっている。

数年前まで多くの数学教室は図書の集約化に消極的で、数学研究の特殊性、例えば、数学図書は実験科学の実験装置に相当する根幹的資源であるというような主張を根拠に図書室の維持への教室の資源配分の優先順位を可能な限り高めていた。筆者がかつて勤務していた九州大学では新しい伊都キャンパスの図書館には理工農等の理系図書の集中一元管理を当初予定していた。計画の初期段階には筆者も加わっており、全体を見るべき立場ではあったものの独自の数学系図書室を数学系研究棟内に設ける工夫を承認してもらうために随分努力をした。その後、計画案はいろいろと変更が重ねられてきたから、現在の筆者は二年後の数学系教室（数理学研究院）移転時の最終的な図書の形は承知していない。

実は、筆者は上述の新図書館設計の審議を通じて最近の図書館思想や他分野の研究状況を知り、数学研究の態様についての意識が相対化された。また、筆者も、自身の関心の拡がりにより、数学以外の教室の蔵書を利用することが増えていたから、他分野の人の数学系図書の利用機会の増大も当然予想されるべきことであった。要するに、数学系教室は、図書の扱いについて、大学図書の一般的な環境変化への対応だけでなく大学全体の研究水準の向上のためにも、教室の占有物から大学の公共財へ、積極的に主導性を発揮して改めていく必要があると、筆者は個人的には思うようになった。

図書館の構造や書庫の設計は物理的な制約が強く、設置された後の変更や改修は容易ではない。初期設計には十分留意しなければならず、現状に密着しすぎないことは大切である。しかし、今後の変転のすべてを予め読み込むことはできない。数学系でも研究教育分野の栄枯盛衰や研究様態そのものの変化もあるだろう。その上、数学自体、学問として公共性がある。当然、数学系図書への需要も現時点の固有の数学研究者からだけではない。さらに、図書の利用は、特定の書籍や雑誌よりも関連分野の参照文献発掘が目的の場合もある。このように考えると、数学系図書室が現時点の固有の数学者にとって利便性が高ければ足りるわけではないことがわかっていく。

結局、数学系図書に限らないことではあるが、探求対象の情報、例えば、書籍の章節や雑誌記事の所在が的確に得られるような優れた検索抽出手段の開発が鍵である。もちろん、巨視的な分類法、例えば、十進分類法の不断の改善は重要であり、このためには数学会など関連学会挙げての積極的な関与が不可欠である。あれは出来が悪いなどという見解は自らの責任を忘却しており許されまい。他方、各図書館の使い勝手をよくするためには蔵書の検索や抽出がさまざまな観点に応じていなければならない。実は、筆者は最近フーリエ解析関連のある書物の標題や著者名を思い起こせないまま OPAC などで探してみた。しかし、この方法では遂に発見できず、知人に尋ねまわって何とか見つけ出した。図書室の配架が、分野別なら直接出向いての発見の機会もあるかも知れないが、著者のアルファベット順だと絶望的であろう。書籍を、標題や著者だけでなく、少なくとも、目次や索引、文献表、概要のデータから検索できるならば、配架法

は問題になるまい。雑誌記事に関してはこれに近い形で検索ができるようになっている。書籍についてももう一歩だとは思うが、すべての蔵書までとなると、個々の図書館だけの対応では間に合うまい。図書館外部の関係者も含め、現役の方々に、このような検索抽出手法の開発導入を宜しくお願い申し上げたい。